

**Kodak**

LICENSED PRODUCT

Black

# KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Centimetres	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
Inches	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19

Yellow

Cyan

Green

Red

Magenta

White

3/Color



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 JAPAN 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

へ13  
2913  
26

貞操婦女八賢誌 八編下

村田

東都

爲永春水編次

夢而不夢一級の首  
疑似不疑賢女の意

第五十一回

登時岩鞆泡之助の思ひ掛けをき典物が其身の素生言  
きより父を害せし吏より一て巧みの伎俩一奸計と  
聞くふ再び胷腹潰毛須臾苦痛もまをうくまを怒是る  
面色血をつゝる眼ぎくえ凄どく憤怒の声をあべて  
噫残念や口惜や俺初年の頃より六餘が素生をかく

トもろく況や父の亡きひをほ病死とのミ一筋ふかひ  
遠へて一毫も餘が所為と悟るざる此身の不覺ハ夫のミ  
キドケ俺の家督を嗣ぎト我名へむりてうきごとく你  
家を挾みトハ快らねども亡父の遺言と言ふ  
是非多く阿答くと覗在親の盤古ある汝がト圓み順みて  
哉年月をるせを草木の陰ト父上の言甲斐あくと  
思せらまん恨み只お一更うづく俺を飽まセ欺きて  
這山中で人知れず殺走をりう我妻と嫁て定まる  
於由モ側妻ふせんと大争ひどや候今汝痴ハ負へ連  
恨ミ重き汝が細首討で迎え死ぬべき最期の一太刀  
受て見よと白刃を杖の立仰うようらゝ豆を噛ちあ  
砍りて蒐々を夏ともせき左辺右辺も一ノ勞ら七髪  
所を典物が豆を飛して色之助が及せ丁と躰落一津  
絶ぬなりふ赤峰ひ身少し應せぬ其腕立及をめ夏と  
ひまでも草葉の陰も典物が於由の圍の伽藍を  
浦山へ眺めて居よもや能きやふ苦しみつん余べ  
引道すこそして渴きせん寛納せよと言ひくも再び右  
てお直に又の下ふ露と散る食も淡き泡之助が花の

顔を忽地の首と併ふ打落さるが爲生の霜と消失  
多く最憐むべきなりけり其時までも八代への辻  
堂の裡からうて脇経の形勢を惶々しく或へ怒り或へ  
悲しみ余所の憂ひの袖濡らそ弱きと憐み不勇婦の  
本心哉回とよく駆出て那典物を取ひてき泡之助を  
救へんと喘る心を推すればほゞ思ひやど其泡之助  
とぞ典物とぞまよう我身のか已をとぞよとぞともも  
泡之助が余をもくらひゆきせば力をそそぐと敵ひもせんが  
渠もや途瘡を負ふたゞ今更ふ詮側タリ夫のミクシモ

此身もまゝ晉領方の討隊を破り漸く這死まで遁き  
来て人間を憚り折りかく二個の武士の其中へ女達者ふ  
て出しが思ひがけぬを此身ふうけて三賢女に  
會日ひよく遠うべしとひで心をあつちがらむる  
堪忍もうの典物が泡之助の首を付時ふりうて心び  
うねり思ひも逆賊典物ア侍ちやと一声高く叫び  
自己が声小狭きつ愕然とうて目をひきけぐれ辻堂ふ  
れ疎せ元さん南柯の爰ゆそぢうける八代へ稍爰覺  
ても肉動き氣も獨きて更ふ爰とす現すも思ひうねりく

姑且の忙然として居たりしが自ら胷と撫ちろ一聲の  
行を試ひて物とはする湯息と俱よ四下を見まへせば  
精寐の間ふ日は暮けん春の夜をまだ遙くも更て  
九日よりの月代えや山の端をとどめとへば八代へ  
まゝ舞のきそ肚裏ふ思ふやう意鉢まや余るみても昨と  
今戦ひよ些の勞きのむうとすせ辻堂ふ憩ひつき  
日の暮をすも覺へぞして漫ふ熟睡をくりし我身  
まづも不覚の本性除の賢女等ふ譚づべ笑ひのうね  
もたりぬべ夫ふ然ても訝しき一睡の間ふ見し爰す  
素より爰へ喜怒哀乐の爲ふあらざる時ハ忽地眠  
爰を見る余まども置爰ひ正爰ひ只一崖ふ捨べ  
くらば又信どぎりのにもしもと老ふる人の言つるを實ぬ  
思ふよ爰ハ其人の常たむかずよ爰を大よく見る物多  
べて亡目の爰不形を見た龍耳の爰ふ声々きも則ち  
此理ふ爰まぐり然らずふ今見一庵爰の夫ふ替て今日  
までも竟か一回見も別まぬ岩鞍人の義悪存亡ぢる  
乞ふとく思ふねども爰ふ一も見一爰が笑のるをぢん與  
ふゆのすりひづ那庵之助が非業の死ハ言ふて返ぬりまよ途の殘り

於由あが薄ま令めい此後のちりふきますまん男お人じば不便ふべんと言い  
うりて相あいましま乍あちま思おもひく久ひそうちら含く笑わらひわら我われ  
えゑうり行ゆすゆぞやぞやももうまきま爰いを左さや右うと世よみみらるるるりりに  
ののすす身み引ひ受うけてまぐまと心こころを惱うなままののききだ不覺ふかく  
涙なまませせへ女子めのわの最狹さいき思おもひいるるかかうねねどども  
金かなとと言いふ成長氣せいこうききき俺おが心こころででひひううよよとと言い  
ウ獨ひとり可か笑わらききを休やすへねり打う呼きふ時ときも今いままで熟じゅく  
清きよき山さんの端は昇のぼる月つき夜よの忽こ地じ雲くも小こ覆おおりりままいいん四よ辺へん小こ暗くろくくるやや外ほか面おもてよりよひひくくのの小こ狗いぬ小こ口くち怪あへ  
たたうう那な堂どう内うち這はいい込こむむと八は代だい目め速はやく見みるよよも嫌うて  
准じゅん備びの姫ひめ刀とうを鞘さや帯おももききよよ引ひ抜ぬきて兩ふた三さん度どうち振ふ是は小こ狗いぬへ是あれ小こ狹せまききけけ口くち怪あへ一呂ろせ辻つじ堂どうの裡うち無なくく煙える煙え  
俗ふ所しょともなくま逃のが失ゆける案あん下げ八は代だいありありあうう俺おももううぞぞも  
此この嘗なにに懲こままを小こ夜よを更かせせううなな今いまよよ里さとりりるる方ほう  
とと案あん内うちももかかトト山さん路じを夜よを犯いたしし候まううけけて行ゆくく今いま宵よへ  
這は所しょふ一夜よを明あく東ひがののああううひひを候まううけけて行ゆくく今いま宵よへ  
定じめめややんと獨ひとり言いうう身みを起おここ又またやや狗いぬの入いららざざうう右う右う  
手てののとと伸のばばして辻つじ堂どうの扉はを内うちへ引ひ寄よせせるる以前まのの所しょへ立た居まるる



又寐の爰を絶びんと再び柱へ身を寄せても春の夜  
風の吹入を更に行くまふ肌寒く寐うとはやどふ種  
種と身の行末と東方を思ひまつてふ然て又をろに  
むけんぢよお梅青柳へゆきの方へ落うちけん氣がまへ  
只毛の毛を昨日洲寄の戦ひより生殉まつすすり  
生れのやどもかとしうねーあ安の奈のわかつらんと友と爲  
身をかのひ心の信ひどんとす听人むりき辻堂に声  
毛を只松風と谷の清水の音のまきりけり斯て時刻の  
うのゆを稍明近くきりー頃りふや爲けん八代の  
俄か公地例をと持病の癪の起りー身殉先づ  
痛手を覚へ身動き速もううぎく秋風にむづり  
やくさんと思ひて准备の薬もくく只手を胸ふか  
當て苦痛を凌ぐだりゆる満る折りも辻堂の迎へ  
來うる当所の莊夫六七口の声うるが中にも記する声張  
上げトキニ皆の荒世の中じく類ふ似合は胆王の太い女  
子もゆりのよ昨日洲寄の松原にて管領あるのむり  
札拂と田畠とよどみどり強さをやうりと逃げの依て  
吏起り我們も夫役み狩出ま女子グリホを索ゆる

なあ昨夜も今宵も追使ひ足草鞋の尻まへ俺腹え減  
ちそ盛き廻りあ那女子もぐ其中でか道とせんか梅と  
せん二個の處女が品草多納六といふ漢人の家ふ竊  
くふ躰きて居るトを知りめら門て稻毛多陣屋へ訴  
出しあ依り又俺門を品草の村隊小對へと八重助々余と  
ひひ莊夫きひ植付前の可惜日せ村の甲乙うちもろい  
懸まで間を狭ひやてハ田の水のみく女房子の體の下ま  
干めうん余のひどやと言ひこそハ毫ふ然たりあらう  
と五七人き農夫ども身の骨惜しむ泣ゑを四言アモウ  
矢ひも一う最囂しく言ひ連まて彼方の路と行こうと  
聞くふ八代まる鷺天堵の件の二賢女へ速くも討隊を砍  
抜て品草村小落延り漢人の家小窟借アラふ乍ち人ふ  
疑ひ見て訴人甘トモトのをくん遮莫此更に三も早く  
二賢女ふ報知だる姿勢ふ捕囬まき遁る道のよむぢる  
ま農夫どもが迹追蒐尚も仔細を索ねーうな討  
隊のくらぬ其先ふ品草村ふ地役ニ婦が難委せ殿  
おぶ様て誓ひを縁びる公の信ふ背くべー噫余きと  
矣頃り我と大さふ身を起せば又りやさく込じ胸先の

瘡痛つちの星元ひしやんをうつまで尾居おひの塙はと仆ふくすま再び  
起おきもひだりとねば這この口惜くちかと八代やしろの心こころもさうふ焦躁じょうさい  
つもく苦痛くわうをげりくて動うごくゆづふ惱うないねば左さやよて能  
えん右うやせんと痛いたひ胸むね先さきまき痛いため思おも按あんふ他ほかゆづまきの  
きづかづくゆも才角さいかくゆり身みの病着びょうせき詮術じんじゆとく阿容あやま  
うて有明ゆめの月影つきかげ薄うすくひづらひく東雲とうぐももゆううちるそ  
峰みねとくろと立て立昇たつる松まつの旭あけの新洩しんせきりそとの辻堂つじどうの差  
込はりこひまて尚まだうち卧ふてぞ居ゐうけりお梅福草うめふくそうにそ候まつ候まつの後のち明あけるありとあきあき余  
程あらわ八代やしろ其その日己みの剝むしをう頃堂ごうどうの痛いたみの瘡つちりうぶ候まつ  
時とき剝むしのぼろくとも品草村ひんそうむら小池おいけゆきそ二脚ふたけが安寧あんねいをそ  
うゑ倘うつ惱うつつむが歓死かんしきせんと覺期くわきを爲つくくとくふ身み  
縕ひだひして辻堂つじどうを出でんとある。星元ひしやんの最義さいぎと少年こどもの生いき  
首くび毛けと袂わきく八代やしろの眼まなこを定さだめて尚まだ見みる。甲夜よの仮  
寐いのの爰いのちを見み。那泡なは之助のすけが面おもて衣きぬ一毫いつばを異こと  
かけききが心こころの中なかふ思おもふや。我轉おの寐ねせ。其後あともハ睡ねませざ  
明あらわかふの程ほ此こ首くびの堂どうの内うちに入いりつづん寝ねふ。昨夜よのよ  
真夜中まよちゆう頃ごろの方ほうともよくひのちの小杓こくわ這こ辻堂つじどうに這こ込こきこを  
追お出だせ。ときのやうん口くちふ哇わ。一品いんを落おちせ。音おとの聞きへへをひも

付で居たる所に備へ此首をうつて思ひやうせん  
見一夏の正夢にそ俺が力を借り典物を猿角縁の妻於  
由とやうふ討せて異と怪うかる此泡之助が幽魂の爲所る  
うづくれ御り生じ然すれば最前は首を怪て來一と思ひ  
狗も又幽魂のうづくにて夢の照據ふ此首我ふ見せんと  
合せ一ものゝ這に只自身の推量をうる渠夫がの灵らぐ  
猿き俺身よ馮まんよう於由とやうが由縁の人の夢ふ見  
せうぶ急地かうの典物の討るべきふ其古えきと所以あらん  
せつと  
すの毛まき角も而も品草村へ往んと見る俺も急に驚の  
がきふ毛毛のりに忍りみて猶も時刻の遅暮一  
婦へりとく危ふうえ一とより見ゆく夢ふまぞ見一  
此首を其傍ふ捨て行んハまむがふて益きやうでも女子の  
半性心をやくも去りうねて再び首をふに取り上づく  
見よハ面ざのけ處す於梅ふ似うふぞ急地ほひ  
一田接ゆう公ふ東隣つ四辺見まへ一最前のうの  
極ト飯を包みよる花田絞りの風呂姿へと速く首を  
かゝ色を昌草村へと素ねり、路の便宜ハ初うねども  
鄉ふよくの農夫が行人道より此道とすが一

ハと心きり且ふまゝせて走りゆきける

第五十二回

鳥を追て原野ふ亡骸を埋む  
密を逃れて却て其身を捕被

有遠程ふ八代へ件の首を携へて不知案内の方をも

品草村と云はず

頻々

の路を急ぐふぞ稍五町不と

来一折一も片辺ふ茂りく小草の中ふ飛羽ともさき

山鳥の何よりやん下立て最畠一く

帰宿

ぐと八代へ

ぬ氣りく找みありつ是を見たふ矢暫や人の亡骸の

血水保りく付としをの山鳥の鳴村て夫の肉を食ふ

懲集り一を見ゆるを淺間一くもまた表記にて多ひ

合あるるまゝ人道未尚近寄りて熟く見るふ衣服の模様

物もも那裏ふ見一泡之助ふ些も遠ひぬのまゝと首

ゆき死骸でひり一くぶ枷と昨夜見一爰へ焼が椎量ふ

後ひゆく此泡之助の靈魂の我を憑みてのまゝ夫と

知りて亡骸を此修野辺ふ捨てて鳥の腹を肥さんハ

むの信ゆきふ似て方を急ぐ折りともせめて這

辺へ堀埋て死骸ハ盤一得をもんと言ひて四辺見ま

を傍の丘ふ亡骸をも速く埋ひる賢女の才覚をあ

支那を八代へあびて宿とあきり 尚矣十町、弛る程ふ  
人家安く建連うり 病瘡りきよる所出けり八代の  
這里にそ聞ふ腰をつくらひて品草村へ赴く、乞ひの  
便宜せ向れ、須臾も猶豫せど此里す又立ひて  
走る心を稍申の刻ひるを、箭口の渡りの川岸まぐ  
豆に住せて近村へまきりや起る胸先の疼痛ふ豆も引  
きね、河辺の茶店ふ立寄りて板床ふ腰をうち樹々  
まみじだりやあらう、夜をまきて在るやふ日ハ西山ふ入り  
来て四辺小暗くかりとろ渺く瘻痛のあまうと  
旅店を出んと為るとき、纏ふ花田の風呂敷へ包み  
か携へ來、一件の首を取りて取り上げよ、見ふ風呂  
まひ同ト花田の絞りでも呼ゆ、遠て見ゆるを謝し  
家ト縫ひ目をみ速く解て椎用ひ、首にぬよで男の効  
頑板ハ今まで我側ふ休む居る、壮俊が取邊へとおも  
らひ、首と好い思ひ遠へて替ひしり、行ひ那  
奴が所為きりん遠く、竹ト邊の歯を取返さば我信  
徒夏とえりぬらん、然うやくとうち良隕取替られ  
小色を基の如くふ縮むとて又よく見是風呂しきの

端きふ少きく呂草村獵師網六と書かひるふぞ八代須更  
うち櫻さくらト今朝明方あさめがたの農夫のうぶ等とうが話談はなべを听きべお悔うめせ  
品草しなの獵人りきじん網六あみろく家の躲のきを居ゐうすを稻毛いなげの陣ぢ所しょへ  
訴となへしと討隊とうたいの對たいあく閑まなつるが夫めも網六あみろく也よも網六あみろく倘うな  
今いま這所そぞくで出會あひ一いゲ那二賢女あふけじよ不宿ふしゆ貸はせ一い網六あみろく也よト  
さうし何なハ免めんむゆと追着おとせて問とひ仔細ひざいの具ぐきとんと  
駆くて茶店ぢやんを立出だきだり船場ふねばの方ほうへとひうしひうしや哉船くわいふね  
の走はしり逐よきけんけんの水食みずくの見みへざとどす品草村しなままむら  
貨か索さね合あざる夏なつひらうと今いま出だる船ふねふうちふうちあらそ向むかひの



胆を潰し八代の猛火のうちお盆入りてお梅お道を尋ね  
うか四辻の人氣を見へざと松の時刻の遅まく一いふらや  
二賢女討隊の為ふ捕へらまゝに付まゝ倘折よくさ  
砍抜り左も右にも毛よう直み稻毛の陣所へ赴きて  
渴と実否をきふり一々再び思按をめぐらさんと言ひり  
其所を立出て濱辺み海にて二三町基来一方とゆく  
折り一も向ふようある夥の挑灯燈豆せんと八代の序  
邊み茂り一數蔭み躰として形勢を観ふとき歎て近頃  
地灯の光アとふとうてよと見ゑふ先ふ我ミ一個の武士ハ  
純もの陣所の眼代きとくん羽戦野榜りりわくとふるくの  
段六を後へる後方よう追来る一名の壮俊くびくの  
へき守備名物り四事其声の濱辺み寄る浪音ふ  
御きとくハ听取せねどお梅が首を討取り一襷  
秀の金を呑むと言ふせりの侍の圓入と假令お梅ハ  
かへとせよお道を逃れ甘くうふく今まく寝姿へきハ  
かへば夫とも欲ふお道すも捕へて出よ其折ふ望み  
仕合寝姿を得せん恁てく言分りまどと言ひ捨て  
那侍ハ袖うち拂ひ寝兵等を急がり立て行ふるを壮俊ハ

尚進ひ苗んとをるとき又りや後方より六十ぢうの名の  
老女身の縛のまへきぐらの壯俊を推止めに更やうん  
争ふと那壯俊はよくも听くに矢庭の老女を小股か抱き  
残邊ふ繫ぎて漢船の中へ投込を纏せ切りより速く  
突出一浪のまへく押流を始終の形勢を覗み八代族も  
あら怒りもじり飛び蒐らんと思ひて獨り心を推焉也  
おもむく月影ふうの壯俊をよしく見立て嚮ふ前口の  
渡一場で首と色と取替一壯俊をみを又尋ねて翻りふ  
惣る八代ハ株至小薦を躍り出づの壯俊と争ふわくとも  
忽地雲ふ入る月ふきこりや暗く見るやどふ基より件の壯  
俊へ好ひ戦ひうざるみや見ふ便宜を得るが如く透せ  
れをまゝ列外一晉ふ紛争て逃行くセ六口惜と八代グ  
一たうりハ焦燥ども案内かく道う生バ追んとどるに  
三術さく須臾躊躇居うける(這一條は四十二面四士の御  
まゝ八代ハ那壯俊を捕逃せし道恨ハ只毛のミタレび嚮ふ  
奴が言ひと小薦ふ躲きて徨園一ふあ梅ハ討生  
二道ハまゝ必死の場所を次抜けて速くも敵を躲せ  
う倘其更の偽りをもへ生涯苦乐を信ふせんと因せ

び一賢女を人ふうりて阿容とわまで此世み  
保命ん道の案内ハ知りども今ふうきて社役を  
索ね出へと問礼し実ふお梅が首討と渠が口より白  
状其恨ミエ報せ其うゑ身を俺身も併シ自害と  
誓ひ言詰を反古ふせド思按ふ及ぶ更久と獨り  
意中ふ良頭ク、祀り行んとあら折しものやどに  
忍び寄りけん後ろふ窺ふひまこの殿兵捕りと声  
を買せ心得うと八代が身を捨りて右左り大庭みニ  
仙を般退みまわりや捕洋く賤兵の大勢或ハモミ  
取り足を取り折重りて其まふ忽地索をどうけよう  
ける嗚呼憐ひべ八代ハ那賢女等が其中身を武術  
殊小勝もあえ勢ふ画まきうるのみが不意を打れ  
更きよび竟ふ擒とさうへり不幸とりもゆきゆ  
余きども強氣の八代のあ更ふ阿容する氣をもき  
怒まる声をあり立て汝等誰が吟呻うきば只一言の  
趣意をす演へご吾俗が由跡を見まくと捕補と  
仔細を言へりふくと急迫立折り多くの捕隊の其  
中より現りと出る以前の武士序もみ勢一欢首

那八代が目先へキツツナカミと賊婦や倭うつすも尚  
種くふ言ひうて身を道まんと争ひや毛見よ休が  
同惡の處女あ梅ハ既ふ討取りそ首へ別ら毛みぢり  
汝幻術ひととどもとや御傳せ身ふ受て貧乏勤  
ぎもタリハセドお道と名奉内て毛まごの罪の次第を  
白狀せよと言ふより先ふ八代へ目速く件の首犯見  
ゆる最前登箭口の渡場みて相替ら見て失ふりしる  
泡え助が首をみぞ板ハ毛梅ハ恙々此場を速く落延  
あり命にても這武士がりうきの情由みて此首があ梅か

首と思ひひやまう我身をい道と見違へけん那杜伎が  
做を呼焉うけの鬼も角もさ一當る此身の索目を道  
是度が二個の賢女の安否を定ふかゆるべ  
思ふ更ふ臘見る色々く故意と言話と和らげてあん  
身ハ何事のお方うかねど吾脅の旅の處すにそあ梅と  
ゆんか道とゆん左板の者でど毛うき毛ねこ半言ハ  
其武士ハ怒まる眼を見ひとまく儘を誰とう思ひうる  
稻毛の陣所の眼代う舟月興伊太度寧うく汝と  
か道と見ト暇居ハ今ままで汝が勢へ居一此小包の風呂

まふ品草村獵師 細六とあらわひるはて 拏明き  
慄ても逍々言語やうと思ひがりうま 風呂しま  
照据ふ取らむを八代の夫ひとなり 口ごり須臾言語  
ちうざうけり

え  
是より後八代が稻毛の陣所のみよみ既ふ命も  
危ふきを不思議か開處を遁れ出武州岩鞍の里の越  
貞婦於由の名告會ひ這田にそ一賢女出現をと  
物譚よまと盡ねども开のま第六輯の初め説くべー

